早门

是は諸國一見の僧にて候我此程は

都に候て洛陽寺社残りなく拝ミ

廻りて候又是より南都に参らばや

と思ひ候

サシ

比は弥生の十日隨花盛

都を操立てまだ夜をこめて藤目乃

上ニの

影そに我も都を立見月じく歸る

春の霞深草山の末遠く見

木幡乃関をさここそ宇治乃中宿
井手の里過ぎ離れてそなら坂や
春日の山とに茂みなく宮路
たゞし春日野の寺かいさ
や奈らし東國長静かにして四面明
神乃宝前に綾こふる鈴も鳴り懸け
うれ歌のとゞすかあられ堂深夜の

朧ころ垂れ花の雨をもならぬれし
神乃心もまた物あはや思ひ遣る
月にちる花乃陰初く宮廻り運ぶ
あはこ乃枝よりもつゞく桜の
雪の庭又色かるくむすぶ寺乃花を
なれかな春のあくがれ春の気色
うれしくとくにさくらを此はま為中

趣ニ事れハ　あれこれ尋ねけるに一つ
打寄りけれハ其　爪十也良是ほと
志ゆれたる森林よ並て木を植けるに
ろ不審よ一る仙人　扨ハ當社始
て渡蓋請の人なりけりさてハ神
そこの所よ寄りて作當社乃謂委く
御物語候へ　さらハ御目りしく語て

抑そも〱當社とやハ神護景雲
二年に河内國平岡よりこれ春日山
本宮乃峯ゑ影向ならせ給ふされ共
此山本ハ嶽山の塩漬く木塩やとつ
もなりつゝまつりまつる杉また藤原や
氏人寄て植し木乃本よ里恵深
きゆゑとあく松樹み太山となるか然

また當社乃ゝ碧はいかなる人の筆なるを
う拾ひけれをすの葉れ一葉を裔よ
付てや去ぬるさを惜ミ給ふを何故
うゝれ煩ひ去けまゝ乃ゝを涼うれ
と今もみる法師紙をうへ置れ
さまた慈悲万行の日れ歌ハ三笠の
山よ長岡にくゝ重昭識の月玄光る

去日の里にくゝ後もなし　うたの
みおりまを昭御ようれを菜
末國去成佛の神末を思ふ所に
思ひ給ひう　慈金乃玉神ゝ治ま
我國を久ゝ乃あめすゝこれ緑
よゝ花ひを香砂里て仏法流布の
ゝを久ゝ乃ゝ霊鷲山ゝて

妙法蓮華経を説給ふ。いまこの娑婆世界
をもて大明神と顕し、此山は伯耆
国の鷲の高根なり。三蓮の山を開
野と開く。菩提樹は未だ伝へも聞かず
教祖を松なり。花を吉日山と名付き
伝へ霊山の浄土乃まなびをとゝめ
やく〳〵いとこの事れい精厚

此池を隠すなり。池のいと霊せら
れて仏の　宮殿　宮殿乃ふ新名池ふ名
山教と　宮殿　こゝ新ふへ山出とへこゝ花
こゝ精深乃池ふ名ふへ男子細れ
乃ふ池名色ふ河経を讀佛母を
ゝて殆里仏　母乃母仏事　日平
ゝ殆仏中神　殆仏と廻向中母紀

是古昔宗盛卿の
あけくれ
れつつ乃山寺に
こ　こ　こ　こ
き髪をつれ澤乃
悲しかるめ
しめさしいりけ
承及ぶ
一人此池に身を
ゆきもせず
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
わさをこう
他の玉藻と見る
ば乎のこゑを
や　宮こ此乎ハ
平　三月
昔天

此門の山時子
一つゞめ
りをなる
ば君
を扱
こ　こ　こ　こ
ゆをよけ
すがとり此宗盛
夫よ清の
数亜あさり
替りをなり
かく
平上カルヒ　こ　こ
宮こ我を
門長と思ひ

よ山葦がわて　宗世の死骸を叡流
あしは　さしもさりがうらの
　　翡翠の羽の髮　うつ
眉墨　しをは　玄眉　墨の神の姿
いたるく　池乃もとの　乱髪うを
をぎこも長と思ひ　白くりさもこの
孫くされ髮をさ　れ溜ぬく池乃玉

藻を見ろう　ぬきと叡西よ　うを
陰情ろうきを　やがて下とく　実を
恨うされさい　ハだとく　ハ乃なき
水の月とは　猿澤の　いきるみを　は
すうやわれハ　宗世乃　幽霊として　池水
よ入に　名ハ池　名の　ろこよ入よ　名ハ
池乃　ものとの　みきか　庭をな

てぐ假すに見しは幻の、采女玄緒
の衣にやふる法ヶ識なるらく
羅や、てんけふ法をうけなるも心
乃みとげ柳を眺めしくする数あり
色淨ふ心の猿澤乃池の玄蓮の量子生
きん能と吊ひ給へとよつきや
皆池乃何すあるされ給ふなき采女と

聞つ人乃しん　恥しあるる古
れ、采女の姿をあらはれなす紅果を
えらしめおりしまさ本よねも人を
用佛性なる何うらうれうえ波の正
水玄庭なれう語りしやや乃玉草木
國土迄　悉皆成佛　縁なるしまし
てや人まみをばらくまや飛女のこと

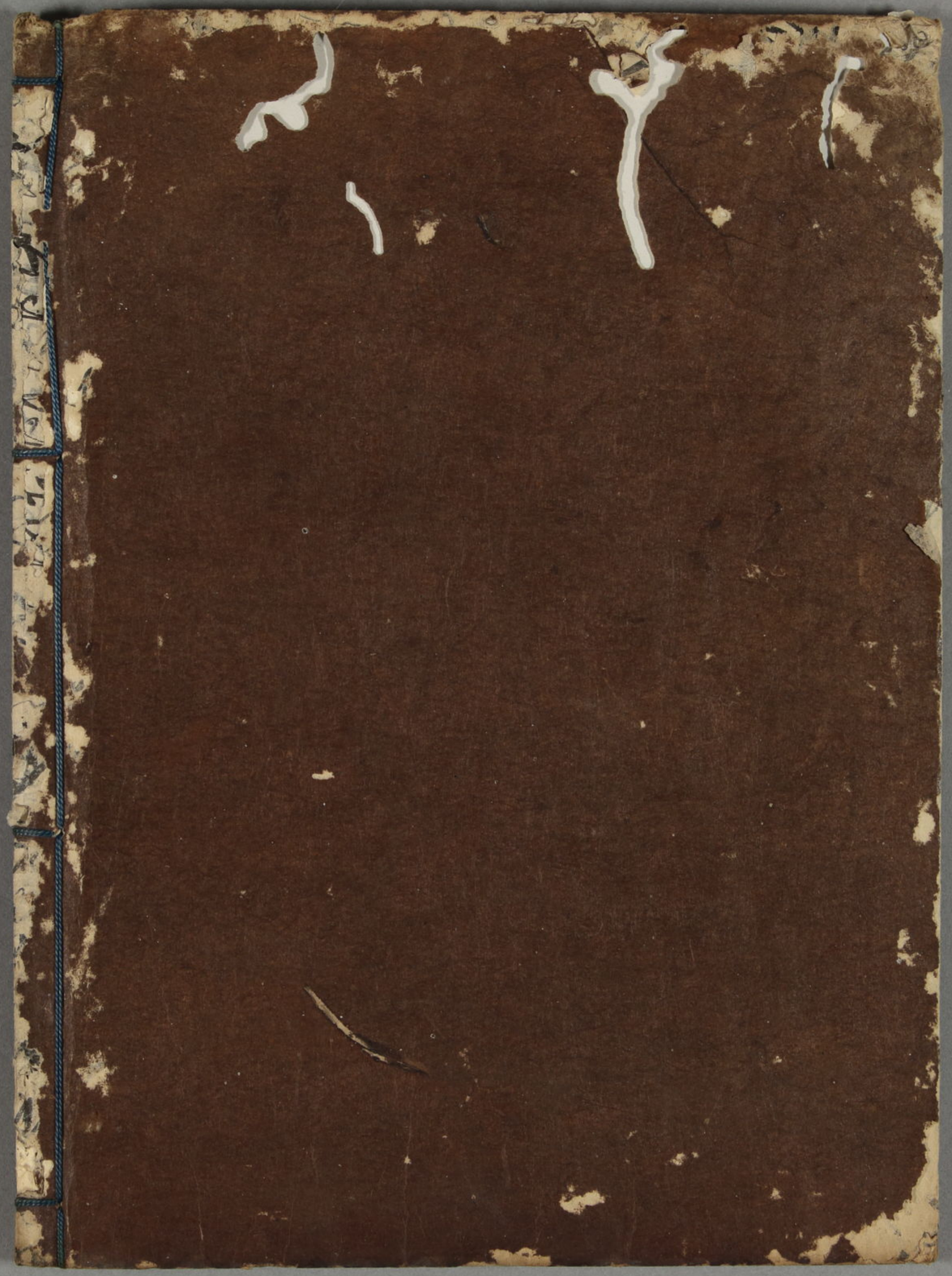
武もすゝや變成男子のねかひすゝめとな
おしは紛れて然も有る補陀樂の南の
岸に至られて南方无垢世界生
まし事を知れもしやくきにや
いかしへよならの都玄世に至理て
神と天とのみちすくに國家をまもり給
誓にせうや　然まゝ君にたのる人

衆和こ玄多き中にりきて采女の苑
衣乃かつら紫の心をそらさゞ君急て
仕へ奉るはまこと世上に玄君をに
深め情うらまことも宮外にゆる
なるゝためし世もあまたくれおほ
かもそれ葛城の大君勅して随に
陸奥の國へ下り詣でみる事

とをろそのありとてまうけるとき
ゐとけれをだにきをあとやうれ大夫
ニニ　元　ニ　元
乃心とけさるに宗女なりけるを女
元　元　元ニ　元ニ
れのりをとるとめ宗乃語の情
ニ　ニ　ニ　ニ
かしとけ叡感をかけてそれをすさ
まし清香山りを洗へ光なる山乃井
玄あさくハ人をうるこのごとれ死

ひをぬもあさまし重静子安金
上ニ　ニ　ニ　ニ　ニ
をるとをとも　熱ハ宗女れ多りふれ
一日　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ
の色ゐ移れ乾島乃やふさに乃ふ
ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　元　ニ　元　ニ
宗れ神ゐ方もめくるゆや盃の河花の
ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ
れ酒乃折ニを采れ女の衣玄笑ゐるく
元　ニ　ニ　ニ　ニ　元　ニ　ニ　ニ
大宝人れかを衣桜をかさを紅ゐ
元　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ　ニ
をもれをとゐ乃あやをあを

葉歌の曲柏子を楯へ袋をしろ
く樫樂使ふ
をだまられおりとしめや曲ふれ家の
ゆ月きばうりを方と回り月明
の月みて山郭公ばをしかるふ
月にまけ月雲井ほゝきす

あま津乙女の袖代まてよ
代をうさらしものを天衣ぬとも
降さぬ君ほなくまれ紫のく
ちうゆきてば子等雲暮れう
くりり多の月と緑を天地おたや
う国去安積よ四海浪立ちう
猿澤の他の面　されさハの池の面

よ水沼くとして波又悠くうとや
元さ　　六元下
石根よ雲をこひて雨ゐ蹴鞠をうり
　　六元
さわ琴樂の夜もすがら宗女玄堂
　　元二下
をかしとおぼすよ讃仏乗の因縁
　　元二下
まれ物をどくらふらり男ゑへやと
　　元二下
てまう波よ入に名きまさこの底
よ入よ名わ